

# ジェンダー意識に問いかける動物の登場者たち

## －バムとケロの絵本を中心に－

高 鷲 志 子

To Enhance the Possibilities of Interpretation :  
Are You Boys, Bam and Kero?

TAKAWASHI, Yukiko

キーワード：絵本、動物の登場者、ジェンダー意識

### 1. はじめに

かつて知人が「バムとケロ」の絵本について、「あれは男同士がいっしょに暮らしてる話なんだよね」と評したことがあった。まだ「バムとケロ」を読んでいなかった私は、「男同士がいっしょに暮らしている」ことについては自分の意見を述べることはできなかったが、「男同士」という言葉がとくに印象に残った。というのも、そのころ私は、『あおくんときいろちゃん』\*1 における「きいろちゃん」の性にこだわっていたので、「バムとケロ」についての知人の指摘を見過ごすわけにはいかなかったのである。

その後、『バムとケロのにちようび』\*2 を手にとる機会を得たが、私にはこの絵本を「男同士」の物語として読むことができなかった。むしろ「男同士」の物語として読むことに抵抗感をもったのである。

このブルテリア犬とカエルのふたり（二匹）の織りなす物語を、「男同士」の物語と解釈してしまうことは、この絵本の広がりや損ねてしまうのではないかと私は危惧している。あるいは、絵本の解釈の多様性を閉ざしてしまうのではないかと怖れているのである。なぜ、解釈の多様性が閉ざされてしまうのか、なぜ、男同士の物語として読むことに抵抗を覚えるのか、いくつかの視点から議論してみたいと思う。

### 2. 動物をキャラクターに選ぶとは

絵本のキャラクターに動物を使うことによって、その性別が曖昧になってゆく場合がある。また、動物を使うからこそ、いっそう性が意識される場合もあるだろう。たとえば、ライオンの性別は外見から明らかである。ライオンが絵本のキャラクターとして使われるときには、たてがみを持った牡ライオンの場合がほとんどだ。または、ライオンそれ自身が「男性性」を表象しているといえるかもしれない。

オオカミの登場者にも男性性が付与されているといえるだろう。なぜならばライオンやオオカミが表象する「強さ」は、従来、男性的なものとして見なされてきたからだ。反対に、登場者がウサギの場合、特にライオンやオオカミなどと対比される時には、私たちのほとんどは、そのウサギに女性性を見いだすであろう。

「バムとケロ」の場合は、作品のなかでは性の区別が曖昧なために、つまり、テキストも絵も開か

\*1 レオ・レオーニ、藤田圭雄訳『あおくんときいろちゃん』。至光社。1967年。

\*2 島田ゆか『バムとケロのにちようび』。文溪堂。1994年。

れているにもかかわらず、受容者側の性を明確にしようとする意識が、絵本の読みを制限してしまう可能性が発生する。このことは男性なのか女性なのかを感じさせないために、意識して動物を絵本のキャラクターに選択した作者の意図とまったく反することもになるだろう。しかし、性はどこまでもついて回る。

同性同士の組み合わせならばそれぞれの違いを、個性として捉えたり、性格や嗜好の違いとして受けとめられるだろうが、異性同士だと、活動的な方を男性として読んだり、料理や掃除などの家事に携わる方を女性として読んだりする傾向にないだろうか？

たとえば、『トゥートとパドル』<sup>\*3</sup> は、二匹のブタの男の子が主人公の絵本である。旅行が大好きなトゥートと、自分の住んでいるウッドコック・ポケットが気に入っているパドル。この作品は性が決定づけられているが、もしこの二匹の組み合わせが異性同士だとしたら、私たち読者はどのように読むのであろうか。この場合は、読者が自分のジェンダー意識を作品に投影し、その上で、性が決定されることであろう。

パドルはトゥートのようにウッドコック・ポケットを離れないにしても活動的である。雪を愛で、スケートを楽しみ、どろんこで遊ぶ。友人たちと誕生パーティをし、スカイダイビングに挑戦する。内容を深く検討するならば、ここで描かれている関係は、トゥートが女の子でもパドルが男の子でも、あるいは二匹が女の子同士でも、どのような関係においても違和を感じさせることはない。しかし、作者は二匹の男の子を主人公に選択したのである。作品の主人公の性が男の子であると決められている以上、私たち読者は、性の問題は棚上げして読むことができる。

作品の登場者を動物にすると、意図的に性別どころか人種や年齢の意識さえも希薄にすることができる。しかし、性別がテキストやイラストレーションによって決定づけられていない場合、受容者が自分の意識を投影して、読みを制限する場合もあるといえ、性別が決定づけられていないという意味で、テキストが開かれているため、受容者が性を選択して、制限して読んでしまうのである。

動物が擬人化されて絵本のキャラクターになった場合、その絵本は国境を越え、ユニヴァーサルに受容されるという利点はあるだろう。しかし、動物をキャラクターとすることで払拭しようとした意図された要素（性別、年齢、人種、国籍など）が、必ずしも読者にその通りに受け入れられるとは限らない。これはもちろん絵本だけの例とはいえないが、『しろいうさぎとくろいうさぎ』<sup>\*4</sup> に人種的偏見があるといった論議があったことを思い出せば、ことはそれほどナイーブではない（白いウサギを白人、黒いウサギを黒人としてとらえ、そこに、抑圧と非抑圧の関係を讀んだ、1960年代のアメリカでの例）。

### 3. 動物に性が与えられると

動物を主人公にしていて、性別が明確にされている別の作品例をあげてみよう。絵本ではないが、最近映画化されて話題になった『シャーロットのおくりもの』<sup>\*5</sup> について考えてみる。

この作品はシャーロットがメスグモであり、ウィルバーがオスブタであることが、ときに議論を引き起こしている。つぎの場面はウィルバーとシャーロットのあいだで交わされる会話である。

‘Why did you do all this for me?’ he asked. ‘I don't deserve it. I've never done anything for you.’ ‘You have been my friend,’ replied Charlotte.……I wove my webs for you because I liked you.

\*3 ホリー・ホビー、二宮由紀子訳『トゥートとパドル：ふたりのすてきな12か月』。BL出版。1999年。

\*4 ガース・ウィリアムズ文・絵、松岡享子訳『しろいうさぎとくろいうさぎ』。福音館書店。1965年。

\*5 E. B. ホワイト作、ガース・ウィリアムズ絵、さくまゆみこ訳『シャーロットのおくりもの』。あすなろ書房。2001年。（Tropy版 154p）

「どうして僕のためにこんなにしてくれるの？」とウィルバーはたずねた。「そんなことしてもらえるなんて。僕は君に何にもしてないよ。」

「私の友だちだからよ。」(中略)「私がクモの巣で字を書いたのは、あなたが好きだから」とシャーロットはこたえた。(筆者訳)

この部分がときに不興を買うのは、読者が、シャーロットに母の姿を見いだすからであろう。じっさいに、クモの巣に字を書くという奇跡的なことをなし遂げたのは、シャーロットであるにも関わらず、ウィルバーだけが注目されてしまうことに、不満を感じる人も多い。

シャーロットの献身に母の無償の愛を見だし、シャーロットは自分の才能を「自己実現として使うのではなく、ウィルバーの成長のために使い、結果的にはウィルバーの成長こそが彼女の自己実現となって」\*6 しまうと読むからである。

これはシャーロットが女性であることに大きく関わっている。シャーロットがメスで、ウィルバーがオスでなければ、こういった読みは成立しないと思われる。この二匹が同性ならば、種を超えた友情の物語として読まれるに違いない。シャーロットが「女性」で、ウィルバーが「男性」であるとされているために、不快を感じる読者がいるのである。

この場合は、性が特定されているために読者は、自分自身のジェンダー意識をものさしにして、作品を読むからだ。あるいは現実の社会におけるジェンダー意識を物語の中に投影させるからなのだ。

性が特定されてはいても、作品におけるジェンダーをほとんど意識させられなかった作品もある。「私、作る人。僕、食べる人。」というインスタントラーメンのコマーシャルが物議をかもし、批判をあびた時代に先駆けること10年、男が料理をするプロットを持った作品である。「ぐり」と「ぐら」\*7 の関係である。

野ネズミのぐりとぐらは、「ぼくらのなまえはぐりとぐら」\*8 と歌いながら森の道を歩いてゆく。この絵本ではふたりが歌う歌にも「ぼくら」という言葉が使われていて、二匹とも男の子であると判断できるが、とくに会話に注目したい。

「どんぐりをかごいっぱいひろったら、おさとうをたっぷりいれて、にようね」、「くりをかごいっぱいひろったら、やわらかくゆでて、くりーむにしようね」\*9 という二匹の会話は、性を特定させるほどには決定的ではない。私たちは「ぼくら」が話しているということをそのまま受けとめるのである。

日本語の会話は性を表出しやすい面を持っていると思われるが、「ぐりとぐら」におけるこの部分の会話は、中性的である。女の子が発した言葉としても充分説得力を持って受け容れることができるだろう。私たちは、言葉づかいがどのようなジェンダー・イメージを与えるかという問題よりも、「どんぐりをかごいっぱいひろったら、おさとうをたっぷりいれて、にようね」という言葉を、野ネズミの男の子が話した、ということを受け入れるのである。

このふたりの会話はまた、演劇的な会話であるといってもいいだろう。ここで演劇的というのは、言葉のいいまわしそのものは中性的であっても、服装などで性別が明確にされている特定の人物、あるいは、キャラクターがその言葉を発したときには、そこで表出されたジェンダーを受け容れるということほどの意味である。

\*6 吉田純子『アメリカ児童文学 家族探しの旅』。阿吽社。1992年。

\*7 なかがわりえこ、おおむらゆりこ『ぐりとぐら』。福音館書店。初版は1963年。以来、シリーズ化されて、現在までに6冊出版されている。

\*8 なかがわりえこ、おおむらゆりこ『ぐりとぐら』。1。

\*9 なかがわりえこ、おおむらゆりこ『ぐりとぐら』。2。

明らかに女性を表出させる服を着て、「……なんだよ。」「……だろう。」という言葉が発する登場人物には違和感をおぼえることもあるだろう。しかし、その場合でも私たちは、ぎこちなさを感じつつも登場者を受け容れる努力をする。そうでなければ、私たちの前にくり広げられている演劇的空間を享受できないからである。

「ぐりとぐら」の場合は、「ぼくら」が、「どんぐりをかごいっぱいひろったら、おさとうをたっぷりいれて、にようね」、「くりをかごいっぱいひろったら、やわらかくゆでて、くり一むにしようね」という会話が性を決める上で決定的な要素として作用していなくても、ズボンをはいて、肩を組んでいるイラストレーションなどの複合的要素から「男性」であることを認めるのである。

ところで、私たちはこの「ぐりとぐら」の二人組をどのように感じるだろうか？ この作品に私たちのジェンダー意識は刺激されるだろうか？ この男同士の二匹の関係は、私たちのジェンダー意識に挑戦しない。この二匹がどんな関係を取りむすぼうとも、安心して読むことができる。それは、ぐりとぐらが一卵性双生児のようで、没个性的だからだろうか（ぐりとぐらを識別するほとんど唯一の方法は、タイトルの「ぐり」と「ぐら」の文字の色と、ぐりが青いズボンをはき、ぐらが赤いズボンをはいているという一致からだけだ。この二匹のそれぞれの個性をきわだたせる場面はみつからない）。男が料理することが好ましいからだろうか。

先に引用した『トゥートとパドル』の組み合わせに対しても不快感を感じることはなかったことを思うと、この「ぐりとぐら」の組み合わせだけが私たちに安心感を与えるのではないことが理解できる。また、ここで検討したように、言葉づかいの問題でもないようである。男同士という同性の組み合わせであることにこそ、私たちは安心感を感じるのではないだろうか。

捕食関係にある動物の友情を描き、話題をよんだ『あらしのよるに』\*10 は、暗闇の中で主人公の二人が会おうという設定のため、それぞれの会話がきわめて個人的である。オオカミは自らを「おいら」と称し、ヤギは「わたし」と自分を呼んでいる。この関係は男同士の組み合わせと読むのが一般的で無難であろうが\*11、「おいら」と自分を呼ぶオオカミを「男性」、「わたし」と称するヤギを「女性」と読むことも可能である。しかし、この二人に異性関係を読もうとすると、それによって提示される問題が、「捕食関係にある動物の友情」を超え、極めて複雑な様相を帯びてくるだろう。友情物語が、そこに異性関係を読みとることによって変化し、私たちのジェンダー意識に挑んでくる。しかし、この読みは作品の多様性を保証し、広げることになると思われる。

「バムとケロ」を男同士と読んだ知人も、バムとケロの関係を男同士と読むことで、自分のジェンダー意識を侵害されないと、無意識にわかっていたからではないだろうか。おそらく、「バムとケロ」を女同士として読んでも、同様のことがいえるかもしれない。『あらしのよるに』も同性の物語として読むことで、ジェンダー意識の攪乱が避けられる。

私は、『ぐりとぐら』は私たちのジェンダー意識に挑んでくる絵本ではないと述べた。その理由は、二匹の一卵性双生児のようなネズミを主人公にし、同性（男）同士の組み合わせが選択されことのためではないかと推測される。しかも、「男性」が料理をする物語は、時代のステレオタイプからも逃れていたのである。

日本語は会話によって、性別ばかりでなく、さらに個人的な情報を得ることができるのは周知のことであるが、その反面、意識して会話を使わないことで、性を隠してしまうこともできる。つぎは、その点について検討してみたい。

\*10 木村佑一作、あべ弘士絵『あらしのよるに』。講談社。1994年。シリーズは特別編を含め、現在までに全部で8冊出版されている。

\*11 映像版では、オオカミを中村獅童、ヤギを成宮寛貴が演じている。



#### 4. 男か？ 女か？：バムとケロの場合

さて、バムとケロの場合を検討してみよう。じっさいに第一作目の『バムとケロのにちようび』のテキストを検討してみたい。

こんなあめのにちようびは、サッカーもすなあそびもできない。／しかたないから、きょうは、うちでほんをよもう。だけど、そのまえにケロちゃんがよごしたへやをかたづけなくちゃ。やっぱり、ほんをよむのは、きれいに、きれいに、きれいに／きれいにかたづいたへやじゃなくちゃね。／さて、これでよし。つぎはおやつをつくって……………と、おもっていたら／どろんこびちゃびちゃのケロちゃんが、かえってきた。せっかく、すっかりきれいにしたのに……／とにかく、ケロちゃんもみみのなかまで、ごしごしきれいにあらって／なにもかも、すっきり、さっぱり、つるつと、きれいになったら、こんどこそ／おいしいおやつをつくろう。こねこねこねて、ぽこんぽこんかたをぬいて／ぼいぼいとあげれば、こんがりドーナツのできあがり。／（中略）／やれやれ、なんとかほんもとってきたし、てをあらって、おちやのじゅんびをしたら、こんどこそやつと、ゆっくりじっくり／ほんがよめる……\*12（本文はわかち書きがされているが、ここでは便宜上、筆者が句読点を施した。斜線は改ページである。下線筆者）

一読してわかるのは、この作品はバムの視点で語られていることである。バムは、読者の私たちに向かって、舞台に立って独白しているような印象を与える（けれども、イラストレーションでは、バムは一度として我々読者の方を向くことはない）。バムは、作品の語り手であるが、といって語り手の主観に依存している文ではない。バムとケロの会話としてテキスト化したほうが自然であると思われる場面でも、一貫してバムの視点から語られている。ケロちゃんに向かって自分の思いを伝えるというより、内的独白のようなテキストであるといえる。会話では性の表出がより明確にされることを意識し、会話を避けたとも思われるのだ。

たとえば、「せっかくすっかりきれいにしたのに……」という表現は、バムの心情の発露としてあるが、この言葉がケロちゃんに対して向けられたとしてもおかしくはない。そのほうが、バムのうんざりした苛立ちがはっきりと伝わただろう。

また、「さて、これでよし。」という独り言のような表現が、ここで唯一男性性を感じさせる可能性もあるが、それは、「これでいいわ」という表現と比較して、いくぶん男性的な表現であるという程度で、断定的ではない。「これでよし」という表現を女性が使わないとはいえないだろう。この表現の性的曖昧さの中には、作者のジェンダーを排除しようという意図や、ジェンダーを意識させないようにするという配慮があるように思われる。

会話は性を表出させやすいと述べたが、その会話を排除することと、独白表現を用いることで、『バムとケロのにちようび』のテキストは、言葉の性別を超えているのである。バムの性が特定されていないために、私たち読者は、テキストを性別の判断のための基準にすることができない。もし、バムがリボンをつけていたり、スカートをはいていたりすれば、女の子と判断できるが、この作品は服装からも決定できない。しかも、最近では、服装が性を決定する有力な力を失いつつある。

「ぐりとぐら」の場合は、男同士の組み合わせであることがテキストで明らかにされている。会話表現は、中性的であっても、「ぼくら」が発することによって男性的言説であると、読者に確認させる。「バムとケロ」については、性別がテキストで明らかにされていないので、テキスト表現から推しはかることが困難になるのである。

男女の組み合わせの問題に関していえば、バムとケロは、両方とも男性、バムとケロは両方とも女

\*12 島田ゆか『バムとケロのにちようび』。文溪堂。1994年。

性、バムが男性でケロが女性、そしてバムが女性でケロが男性という組み合わせが考えられる。これを私たち読者はどう読むのか？ もちろん読者はどう読んでもよいのである。どう読むかによって、読者のジェンダー意識が問われるとっていいかもしれない。さらに重要なのは、まったく性を意識しなくとも読める可能性があるということだ。この点は強調しておきたい。

## 5. 「バムとケロ」を読む：日常によるこびを見つける

『バムとケロのにちようび』のテキストは、巧妙に性を隠しているテキストであると読めることが了解できる。この作品だけでなくそのあとに出版された『バムとケロのそらのたび』（1995年）、『バムとケロのさむいあさ』（1996年）、『バムとケロのおかいもの』（1999年）にも同じことがいえる。

つまり、「バムとケロ」は、登場人物の性を意識しなくとも読める作品であり、作者の意図もそこにあると思われるのだが、なぜ、私の知人のように、ここに性を持ちこんでしまったのだろうか？ おとなとしてこの絵本を楽しむ私たちは、登場人物に自分の意識を持ちこまざるを得ない。私たちは、この世界に性別があることを知った瞬間から、そのことを無視できなくなるのである。さらに、幼い子どもたちのように、主人公に自分を反映させて読むこともむずかしい。

「バムとケロ」に母子関係を認めることは、一番自然であると思われるが、その読みは、自身のジェンダー意識を問われる読み方でもあろう。この二人には、身体の大きさも関わっていると思われるが、保護者と被保護者の関係も読める。

しかし、そこに偏見があろうと女性蔑視があろうと、雨の日に外から帰ってきた腕白小僧（ケロちゃん）をつかまえて、お風呂に入れたり、掃除をしたり、おやつをつくったりするバムの姿（『バムとケロのにちようび』）に母親の姿を見いだすことは、非難されるべきではないだろう。

バムは、自由奔放なケロちゃんの姿に、ときには「うんざり」することもあるだろうけれど、家の中を快適にするために、しなくてはならないこと、必要不可欠なこと、つまり、「家事労働」のすべてをほとんど独りでこなしている。ごく自然に、そして、これこそが生きてゆくことの原点でもあるかのように、それ自体があたかも自分自身の喜びであるかのように、バムは「家事労働」にいそんでいるように見える。

バムの性はここでは問題ではない。男であろうと、女であろうと、バムは、生きてゆくことの基本として掃除をし、料理をしている。バムを「女」として読むと、不快を感じるから、「男」と読みたい読者が存在するのであろう。

家事という言葉に「労働」という言葉が付与されるようになってからというもの、「専業主婦」でいることが、何か悪いことでもあるかのように、「専業主婦」は無能力の象徴のようにくられ、押しやられてしまっていないだろうか？

「主婦の自己実現」「女性の自己実現」というテーマが聞かれるようになってどれほどだろうか。子どもの本の世界でも、母親の自己実現がテーマの背景に描かれる作品を見かけることも多い。自分の生き方を追求するために、家庭を放棄し、自分の子どもと疎遠になってしまう母親が作品に出てくることもある。<sup>\*13</sup>

この母親の姿に女性の「自立」を認め、賛同の声を上げる読者もいるだろうが、いっぽう、母親が責任をはたすことができないその子どもは、別の人が世話をしなくては生きてはゆけないだろう。子どもには「母親」も必要なのである。「母親」という言葉に抵抗感があるなら、別の言葉でいいかえよう。子どもには、愛情をかけ、そばにいて、しなくてはならないことを援助する人が必要なのだ。

ケロちゃんがお風呂にはいるとき、「みみのなかまで、ごしごしきれいにあら」うのはバムである。

\*13 『雪あらしの町』（ヴァージニア・ハミルトン／岩波書店）、『タトゥー・ママ』（ジャクリーン・ウィルソン／偕成社）など多数。

そのあと、ケロちゃんが汚した廊下を掃除し、おやつのだーナッツ作りにリーダーシップを発揮するのもバムである。「ドーナッツ作り」の場面では、二人が対等に行動しているようにも見えるが、丁寧に絵を読んでみると、ケロちゃんの「ドーナッツ作り」は遊びの延長線上にあることがわかる。

掃除は苦痛だろうか？ 料理はめんどくさい、やっかいな仕事だろうか？ たしかに、「うんざり」と感じるなど全くないとはいわない。ときにはさぼりたくもなるし、「ホコリで死んだ人はいない」とうそぶきたくもなる。しかし、いつもいつも不機嫌な顔をして、掃除をし、台所に立つすがたをみせるのは、その行為を否定しているにも等しく、生きてゆくことの否定につながらないだろうか？

生きてゆくことの基本としての掃除や料理を、生き生きと、楽しくやっている姿を、自分の子どもや次の世代をになってゆく人たちに見せなければ、私たちの子どもや次の世代をになってゆく人たちは、その基本的な行為に喜びを感じることもなく、義務感でしかその行為ができなくなるだろう。「家事」を「労働」＝経済的代償を得るもの、としてしか受けとめられなくなるだろう。

洗濯が大好きな「せんたくかあちゃん」\*<sup>14</sup> は、洗濯のよろこびを「ラムネのんだみたいにする」\*<sup>15</sup> \* と表現し、「せんたくしてくれえ、あらってくれえ」と空からやってきた無数のかみなりさまに対して「よしきたまかしときい」と胸を張るのである。\*<sup>16</sup>

ここで問題にされるのは、「かあちゃん」(女性)が洗濯することの是非ではない。日常の営みを肯定し、よろこびを見つけることの重要性である。これこそが生きてゆくことであり、ここに生きることの基本があると認めることである。日常の営みを否定したり、拒否することは、生を認めることにはつながらないのである。

「バムとケロ」の魅力は、生きてゆくための基本的な仕事に喜びを感じているバムの姿が、テキストを超えてイラストレーションにも丁寧に描かれていることだ。

オオカミを思わせる背もたれのついた木製の椅子。犬足のついたソファ。犬型のバスタブと犬型容器に入ったボディシャンプー入れ。犬の取っ手のついたバターケース。ケロちゃんの顔が描いてある長靴。ポケットが犬のアプリケになっているバムのコート、などなど。

大きな家具から細々したものまで描きこまれているイラストレーションは、もちろんそれ自体発見の楽しさがある。しかし、ただそれだけではない。

この家に暮らすバムとケロが、生きてゆくことの基本を楽しんでいる、日常を大切にしている証明として、こういったものが丁寧に描きこまれていると読めるだろう。

『バムとケロのさむいあさ』\*<sup>17</sup> で、凍りついてしまったアヒルの「かいちゃん」とお風呂に入ったあと、バムとケロちゃんとアヒルのかいちゃんとおやつを食べる場面がある。皿にのっているのはプリンだ。プリンの上にはレリッシュとしてビスケットらしきものがのっているが、それは、バムにはバム型の、ケロちゃんにはケロちゃん型の、かいちゃんにはかいちゃん型のビスケットがのっている。料理を楽しむことができるからこそ、こんなプリンやビスケットを作ることができるのだろう。

「バムとケロ」シリーズには、押しつけがましくも、わざとらしくもないバムが自然体で、日常によるこびを見つけて過ごしている姿が、たっぷりとイラストレーションに表現されているのである。この姿をこそ大切に子どもたちに伝えたい。そして、ケロちゃんも幼い読者も、絵本を通してバムのよろこびを自分のものにするを学んでゆく。幼い読者が、男の子であれば、バムに男としての自分を投影し、女の子であれば、女としての自分を投影することができるのだ。そして、バムのよろこびを自

\*14 さとうわきこ『せんたくかあちゃん』。福音館書店。1982年。

\*15 さとうわきこ『せんたくかあちゃん』。12。

\*16 さとうわきこ『せんたくかあちゃん』。31～32。

\*17 島田ゆか『バムとケロのさむいあさ』。文溪堂。1996年。

分のものとする。ここに、性を排除したことの読みの多様性が生まれる。あるいは、たっぷりの愛情をもらったケロちゃんの体験が「他者」を受容してゆく姿に、読者は自分を重ねることもできる。

『バムとケロのおかいもの』\*18 で、ケロちゃんは、いったん買ったオカリナを返してまでフライパンを手に入れる。じつはそのフライパンは、ケロちゃん型のパンケーキを焼くことができるものである。このケロの姿は、バムの日常を楽しむ、日常によるこびを見つける姿勢を学んだからだと思うが、どうであろうか？

このバムを男性とみなそうとも、女性とみなそうとも、だれも意見を差しはさむことはできない。しかし、作者の島田ゆかは、テキストにおいてもイラストレーションにおいても、性を巧妙に排除しているのである。ここに性を持ちこんで、この絵本のもっている広がりをも損ねることはないだろう。

どんな作品であれ、私たちは自分のジェンダー意識を「読み」に持ちこまざるを得ない。性が隠蔽されているテキストでも、そこに自分の意識を反映させて読み解こうとする態度は不可避であるが、その態度には自覚的であるべきだ。

## 6. 「バムとケロ」のゆくえ

「バムとケロ」のシリーズは、先述したように、現在のところまで4冊出版されている。この絵本がたくさんの人を惹きつけるもう一つの大きな理由は、メイン・ストーリーとさまざまに関わりながら存在する複数のサイド・ストーリーにあるといえるだろう。そして、その複数のサイド・ストーリーを保証し、支えるのは、たんねんに描きこまれたイラストレーションである。

「読むたびに新しい発見がある」とはこの絵本のシリーズに対する評価としてよく聞くものであるが、これは、イラストレーションに描きこまれたサイド・ストーリーを、積み重ねて読むよろこびに通じる。

「バムとケロ」シリーズは、巻を追うごとに登場人物がふえている。これがサイド・ストーリーの核を作っているのである。新しいキャラクターがどこで登場し、どのようにバムとケロと出会うのかはイラストレーションだけでしか表現されていない。

最近作の『バムとケロのおかいもの』では、『バムとケロのさむいあさ』で池に凍りついていたアヒルのかいちゃんが、バムの運転する車にケロといっしょに乗っている。すでに家族の一員のようだ。その車にひかれた箱のなかには、モグラと長い3本耳を持ったおじぎちゃんに乗っている。

このモグラとおじぎちゃんが登場するのは『バムとケロのそらのたび』である。おじぎちゃんは、大海蛇の背中で日光浴をしていたのだが、なぜか、バムとケロを追いかけて、海を泳いでバムたちについてきてしまったようだ。

おじぎちゃんが、おじぎちゃんという名前を持っているとわかるのは、『バムとケロのさむいあさ』の一場面である（ここではこれ以上明かさないでおこう。おじぎちゃんが、なぜおじぎちゃんなのかを発見することは、この絵本を読む大きなよろこびだからだ）。

また、『バムとケロのさむいあさ』で凍りついた池のそばの木にはネズミの住まいがある。この大きな木に暮らすネズミも、『バムとケロのおかいもの』では小さな車に乗って、買い物にでかけることになった（なぜ買い物に行くのか、何を買ったのかもきちんと描きこまれている。これには『バムとケロのさむいあさ』とのつながりが見いだせる）。ネズミとバムたちは会話を交わすわけではないが、バムたちはネズミを拒否しているわけでもない。

「バムとケロ」はこのように、時の経過とともに登場人物の輪が広がっている。アヒルのかいちゃんやおじぎちゃんやモグラのように、バムとケロの家で暮らすのもいれば、少し離れたところに住まうものもいる。バムとケロを中心にして、物語は、ゆっくりと新しい登場者をとりこみ、物語を拡大

\*18 島田ゆか『バムとケロのおかいもの』。文溪堂。1999年。



させている。

「バムとケロ」の絵本は、日常によるこびを見だし、日々を大切に生きている人たちのところに人が集まり、ゆるやかな家族ができてゆく様が、バムの独白的テキストを背景に、おもにイラストレーションによる物語によって描かれている。そこには、性を超越してゆこうとするコミュニティの芽ばえがある。

## 7. 「読む」ことの意義

絵本や児童文学には、動物を主人公にしたものが多い。動物を主人公にすることで、物語の世界は豊かに広がり、読者の共感を比較的容易に得ることができる。しかし、動物を作品に持ちこむことの意義はそれだけではなかったことが本稿で明確にされた。また、動物を主人公にすることで、いままですぐ気づかずにいたジェンダー意識が顕れてくることもある。

動物を主人公にすることでジェンダーを曖昧にしようとする作品がある。作者の性を曖昧にしようとする意図に無自覚なまま、自らのジェンダー意識を作品に投影し、作品を読むことは、作品解釈を狭めてしまう危惧があることも指摘した。同時に、特に読者が成熟すればするほど、その傾向は不可避でもある。不可避ではあるが、私たちは、この作者の意図には敏感であるべきであろう。ジェンダーを超えて読むことに、私たちのこれからの生き方に対するヒントがあることを、「バムケロ」シリーズに見ることができたからである。

また、人間の物語であれば、暗く、重苦しくしか語ることができないものを、動物が主人公の物語として語ることで、不純物が排除されることの例があることを知った。問題の中核にストレートに迫ることで、物語がきわめて象徴的に昇華してゆくからである。

「読み」は多様である。しかし、その多様性は、物語の豊かさやよろこびに、そして生きることの本質に迫るものでなくてはならない。

(受理日：2007年2月20日)